

「聖霊様と共に！！悲しませないで」

使徒の働き20章(19章)

■ 聖霊様のイメージ

聖霊様と言えば、イエスさまには鳩のようにくだられ、使徒の働きでは分かれた舌のような炎と表現されています。ですから、聖霊様は炎のように力強い・男性的なイメージがあるかもしれませんが、神さまを表現する言葉も、エルシャダイは女性名詞、エロヒムは男性名詞と、両方で表現されています。聖霊様は女性的な存在で、女性名詞でも書かれています。鳩のように下られたと表現された時の鳩は、だれかれ構わず懐くこともなく、自分の役割を果たす賢い鳩(pigeon)のことです。このように表現される聖霊様は、表面上で人の良い・悪いを判断しません。そして己の好む場所には下られます。その聖霊様が好む場所も外見上で判断しません。私たちの心の中・内側を見ておられます。自分は、聖霊様が好む場所になっているのでしょうか。

■ 聖霊の働き・聖霊との関係

6節に異言や預言のことが書かれていますが、大事なのはそれではなく、御霊に満たされたということです。(使徒 19:11-16) ここでパウロは驚くべき奇跡を行っています、パウロやタオルや前掛けが素晴らしいではありません。パウロは病気で困っている人たちのために祈りました。聖霊様が働く条件は、自分のためではなく周囲の誰かのためにという時です。

また、13節以降ではユダヤの祭司長スケワという人の七人の息子たちが、『ために、悪霊につかわれている者に向かって主イエスの御名をとらえ、「パウロの言を伝えていようイエスによって、おまへたちに命じる」と言ってみよう』とあります。これに対して悪霊は「イエスを知っている(ギノスコ=経験を通して知ることになる)」と答えました。イエスさまの十字架による完全勝利、悪魔はこれに完全に敗北したので恐れる程に知っていると言いました。しかし「パウロもよく知っている(ビスマタイ=理解している)」と答えています。私たちも同じです。牧師や教会を通して知っているビスマタイの神さまから、本当に神さまを体験して(ギノスコ)として知らなければいけません。誰かを介した信仰は本当の信仰ではないからです。これを体験しないと、この七人の息子たちのようにただやってみるだけになってしまいます。「やってみる」だと失敗します。一対一になってぜひこの人を探り求め体験しましょう。

■ 炎と鳩

そこで大切なのは、炎のような働きと鳩のような働きのバランスが必要です。イエスキリストと神さまと聖霊との関係と自分との位置のバランスをしっかりと保たなければいけません。人は常に最善を見出さなければいけません。自分の言っていることが絶対に正しいなんてありません。ここで聖書が大事なのです。人と自分にはイエスさまがいてくださいます。そしてこのイエスさまの見える形が聖霊様なのです。聖霊様に何が正しいのかを聞かなければいけません。聖霊様に近いほど正しい判断ができます。しかし、聖霊様に近づぐためには自分の心のバランスが正しいのか条件になります。心のバランスが崩れていると生活(例えば服装の乱れ、金銭感覚のズレなど)・人生(例えば相手の罪を責めるが自分の罪は認めないなど)のバランスも崩れてきます。

■ パウロとの別れ 神の道=御霊に従う道 使徒 20:18-24、32-38

22-23節からパウロは聖霊様と一緒にいることをことごとく願っていることが分かります。なぜかというとパウロの生涯の半分は聖霊様に全く反したものだからです。しかし人生の後半で聖霊様に出会ってからは自分のルールなど一切捨てて、やりたくないことをやり、行きたくないところへ行くという、ことごとく聖霊様が心に促す良心に従って行って来ました。パウロは、過去の失敗や痛みを理解しこんな自分が愛されたのだから「聖霊がどの町でも私にははっきりとあかしされて、なわめと苦しみか私を待っていると言われる」(23節)ことが分かっているも従うことができたのです。そして「いま私は、あなたがたを神とその恵みのみことばにとゆだねます。みことばは、あなたがたを育成し、すべての聖なるものとされた人々の中において御国を継がせることができるのです(32節)」と、次に神さまと私たちが結びつく時が来たのです。また33-35節では、バランスについて語られています。生活や仕事、教会とのバランスです。イエスさまは人からも神からも愛されました(ヨハネ 3:16)。私たちも同じです。また、当時はローマ帝国の支配にあって強いものが勝って弱いものは淘汰される時代でした。現代も同じです。誰かだけ助けられる愛のない

時代になると、影響力のある人から、影響を受けて心のバランスを失ってしまうのです。このバランスを保つ方法を教えてくれるのが御霊なのです。「神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい(ローマ 12:2)とありますが、この善悪を示すのは鳩のように私たちのそばにいる聖霊様の恵みです。そして、火のように私たちの罪を焼き尽くし正しい道に導く聖霊様です。どちらも大事です。自分の考えではなく御霊に束縛されたいですね。そして自由に動くのは聖霊様です。御霊によっての働きかどうかは結果・実によって分かります。うまくいかないのであれば聖霊様と共にいない可能性があります。聖霊様はいつも共にあろうとしています。神はあなたに弱くときに御業を表す。それは従うから！なぜ弱い時なのかというと、私たちが弱くないと従わないからです。自分が正しいと思い込んでいる時は聖霊様の声を聞きません。ですから御霊に縛られていきましょう。次に自分自身と群衆に気を配る！(使徒 20:25-31) 私たちの教会は万民祭祀です。ですからみんなが、それぞれに与えられた群れの監督です(28節)。そして一番大事なことは自分自身を監督することです。人のことばかり監督しても自分のことばかり監督してもバランスを欠いているのでよくありません。両方を外側から内側の隅々にまで気を配って監督するのです。その理由は教会を荒らしまわる狼のようなものが教会に入り込むからです。聖書に書かれています(29-30節)。狼は隠れて気づかれないように近づいてきます。あたかも仲間のように近づいてきます。これは狼のやることです。これを見分けて監督するために聖霊様が必要です。人の言うことを聞いていたのでは間違っています。これは自分を監督していることが前提です。そうすれば私たちの家族を守ることができます。未永く祝福されます。ですから聖霊様との交わりの時間をしっかり持ちましょう。さらに悪に立ち向かうために目を覚ましていきましょう。悪魔は巧妙で悪賢いですから自分の判断で行動すると負けます。ですから聖霊様との距離を縮めて立ち向かわなければ勝てません。

■ 御霊を悲しませない・消さない

(エペソ 4:2-7)ここに「御霊の一致を熱心に保ちなさい」とあります。すなわち御霊がないと一致できません。自分がうまくいかない理由は御霊がないからです。そして御霊は私たちに自由に働きます。しかし、私たちの心が①自己中心である②憎しみや歴史・過去のことを思っている、と御霊は近づけません。これは御霊を悲しませることになります。もう一つ「御霊をけしてはなりません(1テサロニケ 5:19)」とあります。御霊を消す方法は神の働きに水をかけることです。自分の経験や思いでだれかが行おうとしていることを否定したり決めつけたり判断する行為は、神の働きに水をかけ御霊を消しているのです。聖霊の働きには「バラクレートス」と「ブニマハギオ」の別々の働きがあります。御霊は女性的だと言いました。そしていつでもどこでも働くわけではないと言いました。しかしもう一つの御霊がいて、イエスキリストを信じた瞬間から私たちと一緒にいる御霊です。別々の御霊ではありません。これは内住の御霊と現れの御霊です。イエスキリストを信じた時に内住の御霊が住みますが、聖霊のバプテスマを受けて内側は満たされる時に、外側にそれが溢れ出ます。その溢れ流れた御霊は、御霊の好みで働くのです。聖霊様の好まれる決断をしましょう。(エペソ 4:26-32)26-29に書かれていることをするなという理由は、聖霊を悲しませるからです。そして、私たちに贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。聖霊を悲しませると、聖霊の炎である自分の周りで働いて栄光を現す方が働けない・力が現わせないのです。

■ パウロの遺言

無慈悲、憤り、怒り、叫び、そしりなどを、いっさいの悪意とともに、みな捨て去り、お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさいと書かれています。(エペソ 4:31-32)これはパウロの遺言です。この後パウロはエルサレムに向かいます。そして投獄され長い間そこで人々を励まして最後は殉教します。彼の遺言が今日私たちに届いています。私たちは今までのように感情的・自己中心になり御霊を悲しませ、自分の経験や思いでだれかが行おうとしていることを否定して御霊を消すのでしょうか。今日それをやめる日が来ました。死に至るまで神に忠実に聴き従う者になりたいと思います。

(要約者:行司佳世伝道師)

(2020年9月27日)